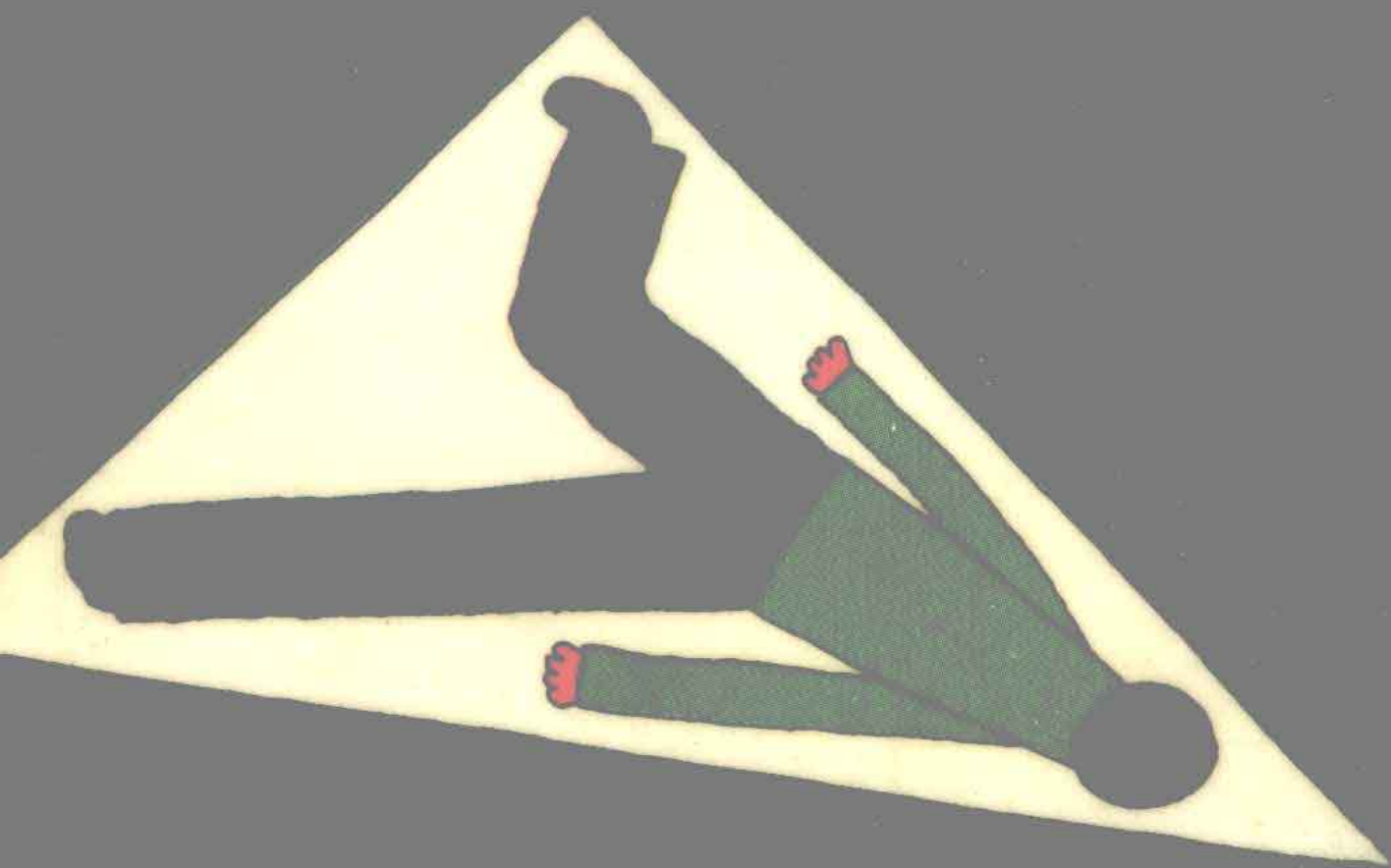
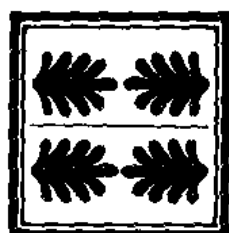






講談社文庫

ヒタコラス 豆畑に死す

小峰 元

昭和50年 9 月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国オフセット株式会社

印 刷 凸版印刷株式会社

製 本 株式会社国宝社

© Hajime Komine 1975

Printed in Japan

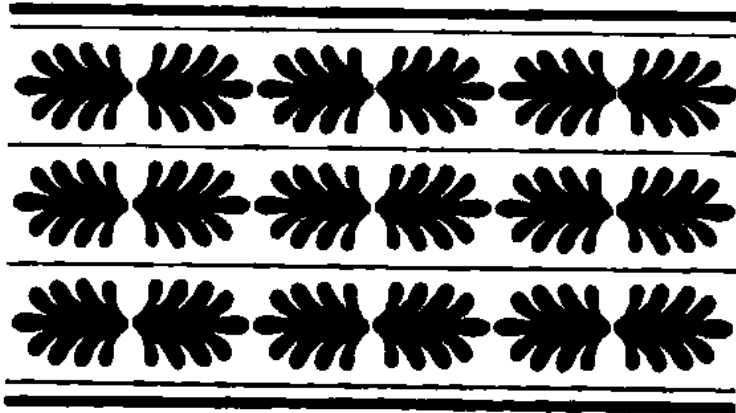
定価はカバーに表示してあります。

(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

ピタゴラス 豆畑に死す

小峰 元



講談社

目次

起の章	セイケン	大和に死す
承の章	ヨウケン	浪華に死す
転の章	オチケン	飛鳥に死す
結の章	ロウニン	江戸に死す

二六八	一八三	八九	七
-----	-----	----	---

殺した人も殺された人も

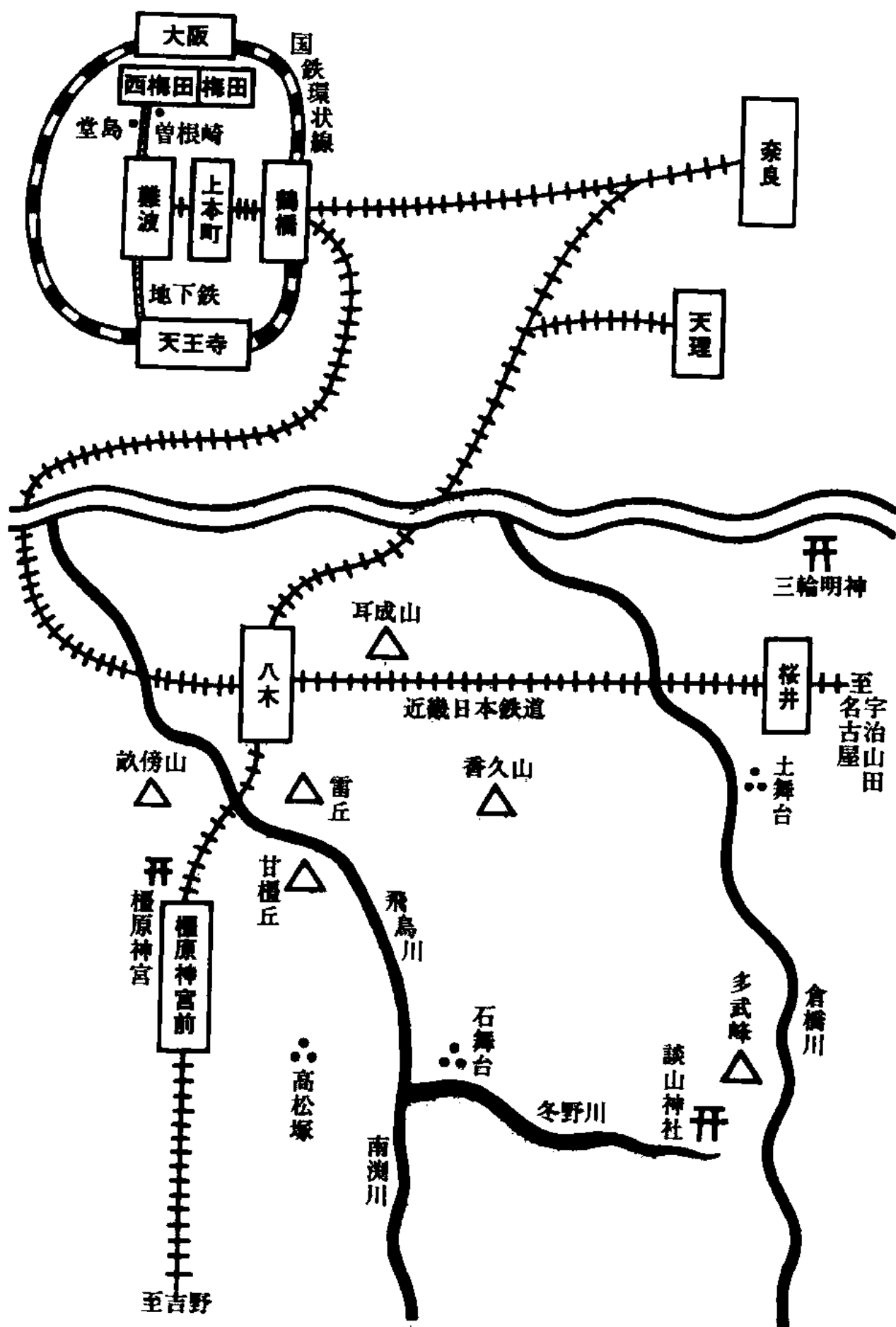
惚れた人も惚れられた人も

架空の人でモデルはない

しかし物語は絵空ごとではない

——セルバンテスの言葉から

ピタゴラス豆畑に死す



セイケン 大和に死す

Ⅰ

電車から吐き出されたとき、その二人は、ちよつと縛れた。

「やるか！」

と背高のほうがかん高い声を出した。

「くるか！」

と低いが太ったほうが応じた。

真紅と濃紺の二つのナツプ・ザックが同時にプラットホームに投げ出され、間髪を置かず、ノツポの足蹴りが太っちよの股間に決まった。と見えた瞬間、太っちよは自ら後ろへ転がって、見事な「回転受身」であつた。

「おぬし、できるな」

ノツポはニヤリと唇を歪めた。覗いた歯の白さが、まだティーン・エージャーであることを示していた。そして右手を上、左手を前に構えて腰を低めると、いえーっ、と奇声をあげて、摺り足で間合いを詰めた。

十数人が、格好の見物とばかりに、二人を取り巻いた。同じ電車の中から降りたばかりの、ゆ

きずりの赤の他人たちである。だから、シャモの蹴合けあいを見物するように目を細めている若者もいれば、不安げに眉を顰ひそめる年配者もいた。若い女性づれは、さすがに気味悪そうに、そして穢けがらわしそうに、足早やに立ち去ったが、遠巻きにした人垣は、つぎの一撃の結果を期待して、声もなく立ち竦すくんでいた。

「喧嘩か」

肩と肩の間から首を突き出した一人が、誰にともなく言った。

「らしまん。ノツポの構えは、あら空手だんな。それも有段者の構えやと、わては見てま。太っちは柔やわらい。いまの受身は黒帯級でっせ。こら、ええ勝負が見られるんとちやいまつか」

禿げた頭の汗を、つるりと掌で拭いて、薄ら笑いを浮かべての「解説」であった。

ノツポが間合いを詰めるに従って、太っちは、じりじりと後退して、駅名標示板を小楯に取った。

「近畿日本鉄道・桜井」

没趣味な太文字の横で、太っちよの額に汗が滲にじんでいた。駅名の下に記された、

「飛鳥めぐり・山の辺の道散策・当駅下車」

の優雅な案内とは、およそ不似合な、歪んだ顔であった。頬の産毛うぶげが、まだ黒くなりきらず、その稚さが幾分かは表情の陰悪さを柔らげてはいたものの、細めた目の輝きは鋭い。

間隔五歩。ノツポの頬の筋肉が、ぴくりとひきつって、

「いやーっ、はっ」

と二度めの奇声を発したとき、

「あほ！ やめんかい！」

人垣を掻き別けて、若い警官が緊張した顔を突き出した。左手で警棒を握りしめて、押取り刀というところであった。

「惜しいところで邪魔が」

と呟いたのはノッポであったが、同時に、ざわと揺らいだ見物人全員の感想でもあった。

「勝負は、お預け、とめいりますか」

太っちょが、けろりとした顔つきで応じた。語尾を鼻に抜いた巻舌であった。本人は氣取ったつもりであろうが、関西生まれの警官には、キザで生意気で、ふざけたガキや、としか聞こえなかった。

「あほんだらめが、人騒がせな。二人とも、ちよつと来て貰おか」

「来い？」

ノッポが不思議なことを聞くように、目を尖らせた。

「なんの用……」

ですか、と言いかけたが、相手が自分といくらも年齢が違わないのを見て、おい、と顔を逸らした。ポリ公、それも田舎の下新米ポリ公には、敬語はおろか、口をきくのも真つ平、と疎めた肩が語っていた。権威をないがしろにされた、と敏感に悟って、こんどは警官が氣負いこんだ。

「なんの用や、とはなんや。さんざんばら人騒がせな真似をしときながら」

「集まって騒いでくれと頼んだわけじゃない」

ノッポは空を見上げて嘯いた。青い空だな、と関連もなく思った。大和は国のまほろば。公害

を寄せつけないのは、さすが、とも思う。

「そうさ」

と太っちょが、濃紺のナツプ・ザックの土を、調子をとって払いながら口を挟んだ。
「お集まりのご一同さまにも」

張り扇のように、パンパンと掌を払って、

「警察ご当局にも、拘わりあいのない、プライベートな問題でゲス」

警官という野暮な止め男の出現で、興ざめた顔つきで崩れかけていた人垣が、これは二幕めのほうが面白そうだぞ、と足を止めた。警官が子供にナメられとる、これが見逃しておらりようか。坊主、しっかりせえ、わいがついてるでえ、と目を輝かせた。こうなっては後へは退けない、威信にかかわる、と警官は声を昂めた。

「そこで、ごじゃごじゃしてたら通行人の迷惑やと言うてんのが判らんのか。プライベートの問題やったら、プライベートらしく、そこの陰で静かに話し合わんかい。けったいな大声張り上げられたら、はた迷惑で、こっちも黙っとるわけにいかんわい」

「そら理屈や」

と、制帽をアミダに被った駅員が、警官に目で挨拶を送りながら、

「源やん、ええこと言うてくれた。ほんまに近鉄としては迷惑やで、ここで騒がれたら」

四年前、地元の奈良県立飛鳥高校を卒業した同窓であった。大沢源吉は「海外研修もあります」というポスターに引かれて警官になり、稲村邦彦はタダで大阪、名古屋、伊勢へも行けるといふので近鉄の入社試験を受けた。志望の動機が動機であっただけに、

「ごつつう、しごかれたでエ」

と四年ぶりに再会した桜井駅頭で領^{うりやう}き合ったことであつた。稲村は桜井駅案内掛勤務。大沢は、その駅前の派出所詰め。友情はたちまち復活した。だから、プラットホームで騒ぎが起こったとき、稲村は早速、大沢に「出勤」を要請したのであつた。

「君ら来て、そこで、ふうふう鼻息を吹いてたら、ええ見せもんになるだけやでエ。まあ、こつちへ来て頭を冷やしたほうが、ええのんとちゃうか」

まったりとした大阪弁でやられては、気合い抜けの思いで、ノツポと太つちよは、顔を見合わせる、両手を広げて、首を竦めた。外国テレビ映画で覚えた、そうした身ぶりが、まだサマになる年齢であつた。二十歳を過ぎては、キザになる。俺には、あの真似は、もうできんな、と思ひながら、稲村は駅員休憩室へ案内した。

「で、なんやねん。喧嘩の原因は」

大沢は首筋を伸ばして威厳をつくろつてから、ことさらに低音で言った。

「喧嘩？ 誰の？」

とノツポは長い脚を組み合わせて、ぶらぶらと揺さぶりながら、のんびりとした口調で反問した。

「誰のやて？ ナメたらあかんで。これは公務で聞いてんのやから。派手にやってたやないか」

「ああ、あれね。あれは、ただの、そう、ちよつとした体操」

「なんやて」

「なにしろ東京から新幹線、名古屋から近鉄と乗りずくめ。いい加減、背骨が痛くなって、手足

が^{けいけん}痙攣しそうになったから、二人で、ちよいと柔軟体操をやったってこと」

「あつしの床運動、その場後方宙返り」は、かなり観衆に受けた感じでやんしたね」

太っちょが、低い鼻をうごめかして、上体を乗り出した。大沢は、ちらと稲村に目を走らせて苦笑した。覚えがあつた。

飛鳥高校三年のときであつた。無札で大阪・難波行特急電車に乗った。あと三分で難波という時間を見計って、派手な取っ組み合いを始めた。止めに入つて、ぶっ飛ばされた車掌は、難波駅に着くのを待ち兼ねて、応援の駅員とともに、二人を駅長室へ引つ立てた。若い者は元気でええのう、と訳知り顔の駅長の説諭に神妙に低頭してみせると、

「仲よう大阪見物するのやぜ」

と擦り傷に赤チンまで塗つてくれた。駅長に見送られて、いろいろお世話になりました、と改札口を出たとたん、笑いすぎて腹が痛くなった。

「その手は古いぜ」

と稲村は顎を突き出して勢いこんだ。

「乗車券、持ってえへんのやろ」

二枚差し出されて、当てが外れた。

「まあ、体操なら体操でええが……」

と大沢も締まりのない口調で、

「ともかく名前だけなと聞いておこか」

「名前！」

とノツポが突拍子もない声を上げて、太っちょの顔を見つめた。

「うっかりしてた。君の名を、まだ聞いていなかったつけ。なんていうの」

「僕、沓野正之。東京は浅草高校の三年生。よろしく」

「辻本雅美。金沢の兼六高校をこの春卒業。ただいま東京で浪々の身。どうも、どうも」
手を握り合う二人に、大沢は目を剥いた。

「なんや、知り合いやないんか」

「新幹線で隣り合うまではね」

「偶然、二人とも飛鳥めぐりやったというわけやな」

「さにあらず」

と沓野が割って入った。

「あつしが桜井へ行くと言ったら、こちらが、どういうわけか、大阪までの切符をペアにして、同行されたんでやんしてね。気楽な人ぞんすよ、まったく」

「そのたいこもちみたいな言葉は、なんとかならへんのか。君は高校生やろ、それも江戸っ子の」

「浅草の生まれよ、ってね。でも、たいこもちとは有難いお言葉。オチケンの沓野といたしましてはプロと認定されたも同然の光栄」

「なんや、オチケンて？」

「落語研究会、略してオチケン」

高校には野球、体操、化学、演劇といった正統派クラブもあれば、ロック、ボウリングといっ

た新興派も人気の点では遅れをとらない。そのなかでも、当節人気上昇中のオチケンを、「ご存知ないとは……」

心外そうな沓野の言葉を、ふん、と大沢は鼻で弾いて、

「そのオチケンが飛鳥めぐりと、どない結びつくのや」

「多武峰の……そうだ、お巡りさん、あとで多武峰へ行く道を教えて下さいよ。多武峰のユースホステルで飛鳥高校のセイケンの連中と共同研究をすることになっていやすんでね」

ほう、と大沢と稲村は視線を合わせた。母校である。聞き捨てにはできなかった。

「セイケン？ セックス研究会か」

伝統を誇る母校に穢らわしい、と大沢は声を尖らせた。

「さすがア」

と沓野は、ぼんと額を打って、

「セイと聞いて性と解く。あんたも好きねえ。が、残念でした。生物研究会。春画より動物図鑑に興味があるという時代離れた奇特な連中でやんすよ、彼らおよび彼女らは。所詮、艶笑落語の味のわかる連中じゃないってね」

艶笑ものなら俺の好みだぜ、とは口に出せず、大沢は渋面を作って尋ねた。

「で、オチケンとセイケンが、なにを企んでるんや」

「さあ、それは本間彦左衛門のハラひとつ」

「本間？」

「彦左衛門ジイさんか？」

大沢と稻村が同時に叫んだ。

「おや、御存知で」

「奈良で本間のジイさんを知らんやつはモグリやでエ。俺は会ったことはないが……」

と大沢は言葉を濁した。平巡査の会える相手ではなかった。奈良県きつての大ボスであつた。

奈良県は総面積の七割までが山林である。それも日本の三大美林と呼ばれる吉野杉をはじめ良質材の宝庫で、年産百万立方メートル。その山林の何分の一かは、本間彦左衛門の所有である。時価総額は、億の上の呼称が必要だろうと噂されるだけで、誰にも判らない。その底知れぬ財力は、当然のことながら、財界だけでなく奈良政界にも底知れぬ影響力を持っていた。

「大物やでエ。君らの生まれる前の奈良県会の議長で、気の遠くなるような金持や。吉野ダラーを知ってるか。知らんような顔つきやな」

昭和四十四、五年からのことである。おりからのマイホーム・ブームで木材の値は高騰し続けた。吉野一帯の山林地主と林業家は太りに太った。一雨千両という言葉が生まれた。一雨降るごとに樹木が育つて千万円の儲け、というのである。使い道に困った金は、北浜の株式市場へなだれ込んだ。

もともとが相場好きである。山では毎週、木材の市が立つ。そこで鍛えた相場のカンがある。投機性の強い小型仕手株が、格好のオモチャになった。買い煽り、売り叩く。なにしろ資金が大きい。二、三十人の山持ちが持ち寄れば三十億や五十億は軽い。その金が、小西六写真、国光製鋼、中外炉工業といった小型株に注ぎ込まれるのであるから、狙った株は旬日のうちに三倍にも五倍にも化ける。